

北海道恐竜・化石ネットワーク研究会 御中

2020年10月6日
化石の里ほべつを応援する会
会長 田中弓夫

貴研究会が「むかわ竜」の通称を使わないよう求めます

新聞報道等で貴研究会が「北海道恐竜・化石カード」や「ほっかいどう恐竜・化石マップ」を制作する予定を知り大いに共感しています。

その立場から、制作にあたってのお願いを申し上げます。

願うのは、むかわ町穂別地区で発掘された「カムイサウルス・ジャポニクス」(以下「カムイサウルス」と言う)について「むかわ竜」との通称を使わないでいただきたいことです。

その理由は、以下に述べるように、この「通称」が、「深い探求と理論的な考え基本とする古生物学の精神」と「多様な価値を創造する化石文化の特徴」、「住民を意思決定の主体とする自治体行政」のいずれにも反する「通称」だからです。

I、第1の理由は、学名がこの化石の特徴を伝え、ロマンを与えるものになっているのに、「むかわ竜」との「通称」はそれを2重、3重に損なう「通称」だからです。

1、カムイサウルスが発掘された地層を間違えて伝える「通称」です。

昨年5月12日の北海道新聞の「読者の声」に福井県の山下さやかさんの投書が載っていました。この方は、15年前に鶴川のたんぼぼ公園を訪れたことを書いた後に、「出土されたむかわ竜も私と同じ空間を歩き、うっとり眺めていたかも・・・」と、ファンタジーの夢をふくらませた様子を書いていました。福井県の人だけでなく、北海道でも「むかわ竜」と聞いて、「カムイサウルスの化石が鶴川地区で発掘された」と思っている人が相当居ることは、私たちの身の回りの人たちの反応からも明らかになっています。

「むかわ竜」は平仮名でも、この投書にあるように太平洋沿岸の「ししゃもの町・旧鶴川町」の地域を思い起します。しかし、鶴川の地層は地球の歴史上一番新しい千万年前以降の地層で、ここから太古の化石は出土されません。

カムイサウルスは、現在の日高山脈になっている所が、白亜紀には大きな海と湿地帯であり、その後地球に当たった隕石で恐竜が絶滅したと言われていた時代に生きた恐竜です。今から7千万年以上前です。これが穂別の地層の特徴で、プレートの移動、地殻変動など地球が変容していく「動く大地」の時代考証の史料です。ですから、北海道遺産の登録・選定も「むかわ町穂別の古生物化石群」と地層との関係を重視し、「むかわ」でなく、穂別地区としています。

「カムイサウルスが鶴川の地層から発掘された」との誤解を与える「通称」はふさわしくありません。
(詳しくは、当会ニュース3号、12号)

2, 学名が示す価値とロマンを覆い隠す「通称」です。

小林快次教授は、「カムイサウルス・ジャポニクス」の学名について、「日本の恐竜化石の中で一番保存の良い全身骨格で、日本を代表する恐竜であり」「日本の恐竜の神という意味を込めた」と言っています。マスコミでは、「カムイサウルス・ジャポニクス」(日本の神の竜)とも報道されています。

「カムイサウルス」の発掘は、「幅広い年代の化石が出たことで、生物の生態系解明調査に重要な土地」「北海道や日高山脈の形成に至る地球の地殻変動の歴史を解く重要な土地」としての穂別地区の重要性を一層高めました。

北海道遺産協議会は、「この遺産は、北海道がまだ海であった太古の昔の豊かな生態系や生物相を垣間見ることができる 貴重な環境を背景とする日本最大級の古生物化石産出地帯(蝦夷層群、穂別、三笠、羽幌、中川)がもつ一つのストーリーです。なかでも、日本初の大型恐竜全身骨格として国内外から注目されたカムイサウルスの他にも、『ホベツアラキリュウ』などのクビナガリュウやモササウルスなどの海生爬虫類やアンモナイトなどを多数産出するむかわ町穂別地域は、顕著な地区として評価しました。」として、2018年11月に穂別地区を北海道遺産に選定・登録しました。

いま重要なことは「カムイサウルス」と穂別地区の地層・地域とそこが醸し出すロマンを結び付けて知らせることです。「むかわ竜」の通称は、この恐竜が示し、与える世界的な価値と太古の歴史とロマンを伝えるようなものでなく、逆に化石の特徴を覆い隠しています。

このような「通称」は、カムイサウルスにふさわしくありません。

(詳しくは、当会ニュース3号、6号)

II、第2の理由は、「むかわ竜」との通称は、行政の一部の人が、元々使われていた「穂別恐竜」との通称を謀略的なやり方で使えないようにしたうえで、町としての何らの会議も行わずに、町長が突然言い出したに過ぎなく、何の正当性もないことです。

「カムイサウルス」の化石が「恐竜化石の可能性が大きい」と公式に言われたのは、2013年9月～10月の第一次発掘調査計画を発表した同年7月の記者会見です。これを受けて町は大いに沸き立ち、化石は「穂別恐竜」の通称で呼ばれるようになりました。そうして、2014年初めには、穂別博物館発行の「ホッピーだより」や町の「広報むかわ」でも「穂別恐竜」の通称が使われ、2014年～15年には新聞やテレビ、科学雑誌でも「穂別恐竜」の通称を使うようになります。

このようななか、むかわ町は2015年になると、突然広報などの町の出版物や町の行事で「穂別恐竜」の通称を使わないばかりか、恐竜化石と穂別が連なる言葉を使わないようにし、「むかわの恐竜」などの言葉を使うようになります。マスコミでは、「穂別恐竜」との通称が使われ、むかわ町内でも住民が使っているのに、むかわ町が行政の文書で突然「穂別恐竜」を使わなくなった理由は一切述べられていません。

このような経過を経て、2016年12月3日に竹中町長が講演会の挨拶で「町内で発見された恐竜化石の総称を『むかわ竜』とする」と言い出します。しかし、「むかわ竜とする」ことを論議し、決めた会議は一切おこなわれていないことは町も認めています。

このように化石と地層の関係や化石を蘇らせて来た地域住民の歴史や気持ちをまったく考えずに、元々の通称を使えないようにして、町長が突然別の通称を言い出したのはむかわ町

が初めてです。また、「町名を通称にした」と言っているのも、長い恐竜化石の歴史の中でむかわ町だけです。

(詳しくは、当会ニュース2号、5号、6号、12号、13号)

Ⅲ、第3の理由は、半世紀前から地層と化石に着目したまちづくりをすすめ、「カムイサウルス」を蘇らせた地域の人たちが喜んで通称でないことです。

町長の発言直後から、穂別地区では「どうしてむかわ竜なのか」との疑問や抗議が噴出しましたが、町はまともな説明をしませんでした。4ヶ月後の2017年3月の町議会では、穂別地区の議員が「穂別地区では、通称について認識の違いや喪失感を持つ人が多い」と発言しています。

抗議や疑問が広がるなか、行政はやっと2017年4月と9月に「通称」についての文書をニュースに載せます。しかし、これが嘘のいい加減な文書だったこともあって町民の理解を得ることができず、2018年には通称変更を求める住民署名が始まり、同年9月には、穂別地区(旧穂別町)の有権者の4割を超える974人が、通称の変更を求める署名を提出します。「穂別の化石と地層」に着目して、国内外の研究者や愛好家から親しまれ、何度もマスメディアで紹介された「化石とロマンの里づくり」を半世紀以上も進めて来た地域の人たちからこれだけの異議が出る化石の通称は前代未聞です。そればかりか、19都道府県から3612の人たちが「通称を正すように」との署名を寄せています。

974人が署名した請願は、議会で不採択になりました。しかし、この議会では、「請願理由には見解の相違がある」と請願の内容を否定できませんでした。その一方で、請願者が求めた「決定過程の問題や担当者の議会での発言の調査」を行わず、「資料提出の要請」にも応えませんでした。そのような状態で、請願を不採択にしましたが、不採択の理由は、「行政の一部の人が言っていることの繰り返し」と「決まって、進んでいることを後戻りさせることはできない」と言うことだけです。地方自治で重要な「行政運営を監視する議会の役割」を果たしませんでした。(詳しくは、当会ニュース2号、8号、10号、11号)

Ⅳ、第4の理由は、「むかわ竜とする」ことに疑問や抗議の声を上げる町民に、町は嘘の説明をおこなってごまかしてきたことです。

Ⅲ項で紹介したように、町長が言い出した翌日から、穂別の人たちから疑問や抗議の声が上がりましたが、町はこれを無視し続けました。しかし、それが広がるのを無視できなくなり、4ヶ月も経ってやっと「説明」なる文書を広報折り込み資料の裏面に載せました。しかし、それでも町民が納得しないため、その6ヶ月後に、『むかわ竜』かわら版の裏面の最後に「説明」文書を載せました。

しかし、これらの「説明」はいい加減な嘘で、その内容に対する疑問や質問には、未だに答えていません。そればかりか、町民には何の釈明もせずに、議会では当初の説明と異なる嘘の説明を言ってごまかし続けています。

古生物学は、高度の鑑定能力と鑑定に基づくデータ研究によって理論体系を構築していく、極めて精緻で厳格な学問です。このような古生物分野に、嘘を含めたいい加減な態度を持ち込んだのは、むかわ町が最初であり、最後になるでしょう。

(詳しくは、当会ニュース4号、5号、7号、8号、9号、13号)

私たちは、2017年から「穂別の化石を『むかわ竜』とするのを正す」運動を進めてきましたが、この間の町発行の文書や請願への議会での審議、私たちの調査などを通じて、自治体としてあってはならない不正常的な事実が次々と明らかになって来ています。

これらは、むかわ町だけの問題ではありません。また、古生物学会や化石文化にとっても重大な汚点になるものです。

そのため、会は今年の7月20日に、「古生物の学者、研究者、愛好家のみなさんをお願いします。北海道穂別地区で発掘されたカムイサウルスを『むかわ竜』と言わないでください。」との文書を発表しています。

以上が、化石の里ほべつを応援する会が、「むかわ竜」の通称を「北海道恐竜・化石カード」や「ほっかいどう恐竜・化石マップ」で使わないようにお願いする理由です。

ご検討をお願いします。

なお、貴研究会の取組みに敬意を表していることをお伝えした上で、検討していただきたいことが2点あります。

一つは、平成30年8月発行のパンフレット「恐竜・化石を活かした地域づくりの方向性」で、【目指す姿】について、「化石を発掘し、地域の宝として育ててきた歴史と風土を学ぶ」ことも位置づけていただきたいと思います。

2017年5月8日に日本古生物学会が会長声明を発表しました。

この声明は、「化石は、過去の地球や生物界の様子を記した最も重要な物的証拠ですが、その発見から発掘・収集・保全・収蔵整理・研究・展示・社会教育に至るまで全てに関わっているのが博物館の学芸員です」と述べた後で、「彼らが標本・資料に新たな価値を付加し続けてくれるおかげで、常勤の学芸員がいる博物館では、地域や規模の大小にかかわらず、学術的レベルの高いユニークな展示や社会教育が行われており、その活動は国内外から高く評価されています。」と強調しています。

ここで言っていることは、発掘から8年間クビナガリュウの化石と思われて保管されていたこの化石を「恐竜の化石では・・・」と示唆して蘇るきっかけを作った佐藤たまき東京学芸大学准教授が、「穂別は幅広い年代の化石が出ていて、生物の生態系解明調査に重要な地区で、穂別博物館は標本の所蔵が多く、学芸員が常駐して学術研究をサポートしており、外部の研究者が安心して利用できる」と研究のために度々来館していたことや、小林快次教授が2019年発行の著書「恐竜まみれ」で、カムイサウルスに触れた「ついに出た 日本初の全身骨格」の章で、「ある学芸員の執念」との節を設けて、穂別博物館の櫻井和彦学芸員（現館長）の功績を紹介していることと重なります。

それだけに、70年前から住民が化石に親しみ、旧穂別町が40年も前に困難な財政の中で全国でも珍しいと言われた「化石の特化した博物館」を建設し、学芸員も任用して、「森と化石とロマンの里づくり」を進めてきたことの功績とその歴史を後世に伝えていくことが重要です。

このようなことは、穂別地区だけでなく、貴研究会が着目している地域ではどこでもあると思います。その歴史と風土、住民の功績が、新しい世代に受け継がれていくことを、「恐竜・

化石が有する価値の継承」の中に、項目として位置づけていただきたいと思います。

なお、前述の会長声明は、最後に、「一方、博物館の標本や野外の露頭などの地質学的名所を観光資源として適正に活用するのは、文化的に見て有意義だと思います。しかし、経済的な打算のみが先行し、肝心の『知的創造』を伴わない単なる『見世物』では、すぐに飽きられてしまい、長い眼で見た場合、文化的観光資源として持続できないことは誰の目にも明らかです。」と強調していることも是非重視していただきたいと思います。

もう一つは、マップでは市町村名でなく、地層が引き立つように地名を重視していただきたいと思います。

その意味で、上記のパンフレットの3ページ「2, 恐竜・化石が有する価値の継承」で、新生代の化石で「ナウマンゾウ（忠類）」、「デスモスチルス（歌登）」として、化石と結びついた地名である忠類や歌登を記入しているのは大事な見識だと思います。しかし、このページで穂別地区から発掘された化石だけは、全て「むかわ」になっています。むかわ町の地層については前述しましたのでここでは繰り返しません、むかわは行政を行う機関名であって地名ではありません。忠類や歌登のように化石と結びつく地名である穂別としていただけないでしょうか。穂別町は2006年に鶴川町と合併してむかわ町になりましたが、同じ2006年に忠類村は幕別町と合併して幕別町になり、歌登町は枝幸町に編入して枝幸町になりました。さらに、北海道遺産協議会がむかわ町穂別地区の古生物化石群を北海道遺産と選定したことから旧穂別町で発掘されている化石だけを（むかわ）とするのは妥当でないと考えます。

以上ですが、ご検討のほどよろしく申し上げます。